

平成28年度教育事業（モデル事業）

おおずふれあいスクール

自然・社会・文化・スポーツ等の様々な体験活動や交流を通して、いくつもの出会いや挑戦、発見や感動がありました。その中で自分の進むべき道を見つけ出す活動に取り組むことができました。

1. 事業実施までの経緯

「おおずふれあいスクール」は今年の1月8日で19年目を迎えた。その間に、不登校で悩む多くの子供たちの心に寄り添い、その心の居場所を提供すると共に、子供たちの自立を支援し、その進路決定の援助をしてきた。さらに、平成13年度からは、対象者の枠を広げ、青少年の社会的自立を支援する取組を進めてきた。

国立青少年教育振興機構では、平成21年度に「機構活性化プラン」を策定し、平成22年度より「課題を抱える子供を対象としたプログラム開発事業」を本格的に開始している。開発事業の対象は、不登校、ひきこもり、ニート、特別支援の子どもたちとなっており、国立大洲青少年交流の家としても、不登校の領域でこの事業に参画している。

現在、不登校児童・生徒及びひきこもりがちな青少年は、大洲市や大洲市近隣にも多く、「おおずふれあいスクール」は、この地域になくてはならない存在となっている。大洲市教育委員会や県内の教育センター（適応指導教室）と綿密な連携・協力を図りながら、地域のニーズに基づく、施設の特徴を生かしたプログラムの開発・実践を目指している。

2. ね ら い

不登校児童生徒やひきこもりがちな青少年に居場所を提供し、国立大洲青少年交流の家のフィールド、人材、設備などを活用した自然体験活動や社会体験活動をとおして、自立を促し社会への適応能力の向上を図る。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
4. 共 催 大洲市教育委員会
5. 後 援 愛媛県教育委員会
6. 期 日 平成28年4月1日～平成29年3月31日（通年）
7. 場 所 国立大洲青少年交流の家及び近隣施設
8. 対 象 者 心理的・情緒的理由による不登校児童・生徒
16才～22才までのひきこもりがちな青年 15名程度
9. 支 援 者 大洲市教育委員会職員2名、国立大洲青少年交流の家職員3名

10. 日 程

月～木曜日とし、金曜日は学校チャレンジデーとする。休日は学校に準じる。

< 日 課 表 >

	9:00	10:00	12:00	13:00	13:30	15:00	15:30
月・火・水	マイプランタイム	スタディータイム	昼食	清掃集会	ふれあいタイム	1日の反省	
木					専門委員との活動		

- 日課表を基準としているが、時期により種々の活動を展開できるように柔軟性をもたせている。
- マイプランタイムでは、1日の計画を立て、読書やジョギング等を行う。
- ふれあいタイムでは曜日毎に農園作業、英語指導助手による英会話、スポーツ、手芸・調理実習等を行う。
- 金曜日の学校チャレンジデーは、可能ならば学校への登校を促す。

11. 支援体制

- 運営委員会、専門委員会を組織し、活動支援を行った。
大洲市教育委員会教育長、市内中学校長、県立高等学校長、市内小学校養護教諭、臨床心理士、八幡浜保健所健康難病母子保健係長、愛媛県若年者就職支援センター長、大洲青年会議所、大洲青少年交流の家所長、同企画指導専門職、計10名で運営委員会を構成した。
また、13名の大洲市内小・中学校教員による専門委員会を組織し、月に2回程度スクール生の活動を直接支援した。
- 「親の会夜の集い」では臨床心理士を迎え、保護者同士、保護者とスクールの連携を図った。
- 関連事業として、宿泊型の職場体験活動を開催した。

12. 活動内容

地域との連携や当所の人的・物的資源の特長を活かし、学校復帰、社会参加を促した。活動プログラムについては、時間設定などの大枠だけをつくり、具体的な活動は青少年の意欲・意思を最大限尊重し、のびのびと活動し居場所が実感できるよう配慮した。また、多くの活動を企画し、興味と関心に応じて自らが選択できるように「自主活動」「社会体験活動」「自然体験活動」「文化・スポーツ活動」の4つの活動で支援した。通常の通所支援のほか、交流の家活動プログラムを積極的に活用したり、所外活動にも取り組んだり、その時々通所生の実態を把握しながら、臨機応変な活動プログラムを計画し、実施した。

(1) 自主活動

学校在学中の児童生徒には、学習を主として基礎学力の補充を行った。一方で、主体的に判断し行動する能力を育むことをねらいとして、趣味や特技の伸長が図れるような活動にも取り組んだ。



(2) 社会体験活動

仲間とふれあい、自らを律しつつ、協調性を育てることや、自己の長所や能力を発見し、感動する心など豊かな心を育てることをねらいとして、職場体験事業に参加させた。また、今までの自分を見つめながらこれからの生き方について考え、たくましく生きる力を養うことを目的として、社会見学等にも取り組んだ。

交流の家主催事業「ふれあいワークキャンプ」では、工場での職場体験を通して、働くことの意義を体感することができた。また、県外の青少年教育施設を利用した宿泊体験学習や交流の家のフェスティバルでの対面販売を通して、他者とのコミュニケーションを図る取組も実施した。



(3) 自然体験活動

自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和していくことの大切さを理解させることをねらいとして、農園作業やカヌー体験、乗馬体験等の野外体験活動に取り組んだ。

「おおざフラワーパーク」の一面に設置されている体験農園「なるなる畑」では、年間を通してさまざまな野菜を育てることができた。収穫した野菜は自らが持ち帰るほか、普段お世話になっている方々にも食べていただくことができた。



(4) 文化・スポーツ活動

音楽や美術といった芸術に親しむ活動や、心身を鍛え、たくましく生きるための健康・体力の維持増進をねらった活動に取り組んだ。茶道や陶芸、音楽等の活動では外部から講師を招聘し、専門的な指導が受けられるよう配慮した。



13. 成果と課題

大洲市教育委員会との共催事業「おおずふれあいスクール」は20年目を迎え、不登校児童・生徒、ひきこもりがちな青年の心の居場所として地域に定着している。今年度は、12名が登録し、ふれあいルームや野外での活動に取り組んだ。今年度は通所生や見学者として小学生がスクールに通う姿が見られた。青年は3人とも前年度の通所生であり、継続しての登録と、高等学校進学後、退学により再び登録したケースとがあった。通所生の若年化の傾向は変わらず、今年度も青年部への新規登録は無かった。通所の状況には個人差があり、登録後は継続して通所したケースもあれば、登録のみでほとんど通所できないケースもみられた。また、スクールでの支援を経て、学校復帰（保健室登校を含む）を果たした通所生もいた。以下に、通所生の受け入れ状況と、復帰等の状況を示す。

平成28年度おおずふれあいスクール生の受け入れ状況等

	小学生	中1生	中2生	中3生	青年	総計
登録数	1	0	6	2	3	12
復帰						0
ほぼ復帰			1			1
どちらでもない	1	0	5	2	3	11

大洲市教育研究所第三専門委員会を中心とした専門委員会活動を、今年度は6月から2月まで、計21回計画した。専門委員会の活動は木曜日の午後に行うこととしているが、27年度より専門委員の活動方法について見直しを図っている。昨年度の反省を活かし、今年度は各専門委員の負担を軽減しつつ、専門委員以外の教諭、養護教諭等が通所生と関わりをもつ機会を確保することができた。その結果、ふれあいスクールの取組を現場の教員が知るよい機会となった。また、実施前には「毎回知らない教員が指導に当たることで、子どもたちの戸惑いが生じるのではないか」といった問題が指摘されていたが、その点について、今年度は特に大きな支障は認められなかった。

親の会夜の集いは、子どもの現状や将来についての不安を本音で語り合い、情報を共有、相談できる場として有意義な時間となっており、保護者の相談窓口としても機能することができた。

今年度、12名が登録をしているものの、常時1～3名の通所生で活動することが多かった。通所に関しては送迎を含め、さまざまな課題がある。今後もそれらの対応策について検討していく必要がある。本事業の対象が小学生から青少年までと年齢層が広いので、学齢児童生徒への学習支援や進路指導、青少年への就労支援等、個に応じた支援体制を確立していく必要がある。

平成28年度「親の会夜の集い」

	期日	参加人数
第1回	6月21日(火)	5名
第2回	11月22日(火)	8名
第3回	2月28日(火)	3名

参考資料 運営委員・専門委員によるアンケートの回答（集計結果）

【運営・専門委員17名より回答（設問により未回答あり）】

1 この事業のねらいは適切でしたか。

4 適切だった 【17】

3 どちらかという適切だった

2 どちらかという適切ではなかった

1 適切ではなかった

（専）ふれあいスクールなら通うことができる生徒がいる。

（専）体験活動の積み重ねの中で、自立（自律）に向けての意欲や生きる力が生まれてきていると思う。

（専）何年もこのスクールがあるのは、やはり需要（必要性）があるからだと思う。

2 ねらいに沿った適切な活動がなされていましたか。

(開催時期、時間設定、参加者のニーズ、所の特性を生かした内容等)

4 なされていた 【15】 3 どちらかというとなされていた

2 どちらかというとなされていなかった【1】 1 なされていなかった

(専) 通所生のニーズをつかむことが難しいと感じている。通所生の様子や要望を、今後も専門委員会で紹介して行ってほしい。

(専) パラエティに富んだ活動だった。

3 全行程を通して健康・安全面への配慮はなされていたと思いますか。

(活動場所の施設・設備、参加者への健康・安全管理、スタッフの健康・安全管理等)

4 なされていた 【10】 3 どちらかというとなされていた 【1】

2 どちらかというとなされていなかった 1 なされていなかった

(専) 特に怪我等なくスムーズに活動できていたと思う。

(専) スタッフの先生方が、通所生のメンタル面を含めた状態把握を的確にさせていただいていたのでその情報を受け対応することができたと思う。

4 運営に必要な準備ができていたと思いますか。

(外部との事前打ち合わせ、道具・材料、活動場所等)

4 できていた 【9】 3 どちらかというとできていた 【2】

2 どちらかというとできていなかった 1 できていなかった

(専) 同じ班の先生と連絡を取り合い準備等ができた。

(専) 茶道教室の時、事前に下見に行かず、せっかく備え付けの道具があったが、活用できなかった。

5 組織は合理的になっており、機能していたと思いますか。

(委員会、スタッフ・職員打ち合わせ等)

4 機能していた 【9】 3 どちらかというと機能していた 【2】

2 どちらかというと機能していなかった 1 機能していなかった

(専) 専門委員会の中で情報を共有し、協働することができていた。

(専) 連絡等が遅くなってしまった。

6 スタッフは、参加者(スクール生、保護者等)とのコミュニケーションがとれていたと思いますか。

4 とれていた 【7】 3 どちらかというのとれていた 【4】

2 どちらかというのとれていなかった 1 とれていなかった

(専) 活動の中で「アンゲーム」を行った。通所生のみならずスタッフや参加した教員の意外な思いや一面を共有することができ、心の交流を図ることができた。

(専) スクール生との会話から、コミュニケーションがとれていると感じた。

7 参加者(スクール生、保護者等)に満足してもらえたと思いますか。

4 満足してもらえた 【2】 3 どちらかという満足してもらえた 【9】

2 どちらかという満足してもらえなかった 1 満足してもらえなかった

(専) 保護者の方々の感想は分からないが、スクール生には満足してもらえたと思う。

(専) 参加した生徒は、楽しそうに活動に参加していた。

8 ねらいは達成できたと思いますか。

4 達成できた 【7】

3 どちらかという達成できた 【3】

2 どちらかという達成できなかった

1 達成できなかった

(専) 環境に恵まれた施設なので、居場所の提供はもとより、自然体験活動や社会体験活動に参加することで豊かな経験ができ、様々なことを学ぶことができているのではないか。

(専) 長い目で見ないと・・・。

9 予定通りに運営できたと思いますか。

4 できた 【6】

3 どちらかというできた 【5】

2 どちらかというできなかった

1 できなかった

(専) スタッフや職員の方々の働きにより計画的に運営されていると思う。

(専) 自分たちの担当の中では、運営できていたと思う。

10 その他、何でも気づいたことをお書きください。

(運) 活動(プログラム)の意味づけが大事になるかと思う。何のために作業をしているのかを理解し、手に入れることのできるスキルを知った上での活動(プログラム)ができると、自主性も向上していくように思う。

(運) いつも先生方が細やかな気配りで生徒たちに接されていることに頭が下がる。現在の対象者であれば、「麦の家」の方のアドバイスを頂くのも良いかと思う。

(運) ○小・中・高の児童生徒及び16~22歳までの引きこもりの青年を対象としている
(広範囲)

○大洲市及び近隣市町の対象者を受け入れている(広域)

○自然体験活動ができる

この3点は、「おおずふれあいスクール」の強みだと思う。継続を希望する。

(運) 広報(関係機関や関係者)への呼びかけや周知は十分であったかの検証をしてみると良いと思う。

(専) 今年度は、専門委員全員が専門委員会とふれあい活動の両方に参加することができて、情報を共有できて良かった。

(専) 昨年度から目標に『基礎学力の補充、学校復帰への支援』という文言が加えられていますが、それらについての実践内容について成果等があれば教えていただきたい。

(専) 小学生の通所が何(十)年かぶりにあったと思うが、小学生の通所についての意見を委員から聞いてみたい。

(専) いろいろな活動の中で、子供たちに関わっていただき、引きこもりにならないで通所できている。ありがたいと思っている。

(専) 短時間の活動のみなので、どうだったのかな?という不安はある。

(専) ふれあいスクールまでどうやって通うか(通所手段)は、課題である。

(専) 「理科実験」は、お楽しみ実験も組み込まれていて、参加通所生全員が素直に笑顔で取り組んでいた。また、指導援助する側も通所生とともに楽しみ勉強させていただいた。

(専) いろいろな学校の先生と話をしたり、活動したりすることは、対人関係を築く練習ができ良かったと思う。望ましいコミュニケーション能力を身につけるのも大切だと思う。

11 ねらいを達成するためにどのような活動を取り入れると良いと思いますか。

(運) 表現(ダンス)や、SST的(心理劇的)な時間があると良いと思う。

(運) 様々なタイプの人との交流をすることで、人生の選択肢が広がるのではないか。

(運) 高校の理解が得られればオープンスクール的な体験を希望者にさせてはどうか。

(運) いろいろな体験活動から、個々に合ったものを見つけ出していく。

(担当：企画指導専門職 森分洋樹)